

瀬戸内の港紀行(その3)

2020.9.27 池田良穂

3日目の主目的は、因島の歌港と本州側の戸崎を結ぶ「歌戸渡し」に就航する「第1&2歌戸丸」と、鞆の浦から走島への新しいカーフェリータイプの「神勢丸」に会うことでした。

当初は、尾道から向島に渡り、歌戸渡しで本州側に再上陸して鞆の浦まで陸路での移動することを考えていたのですが、尾道から備後商船のカーフェリー「百風」(ももかぜ)に車で乗船すれば、途中で歌港に寄るので歌戸渡しも船上から見れて、常石まで洋上を行けることに気がつきました。しかし、尾道で備後商船の車乗場を探しましたが、車が乗れるような棧橋はありません。調べてみると、尾道では車を扱っていないことが分かりました。

そこで、向島へは渡船で渡り、向島の歌港まで陸路を走って、「百風」に乗ることにしました。尾道水道を渡るのには、一番東側の尾道渡船の「にゅうしまなみ」を利用しました。車も人も130円という安い運賃だったのにびっくりしました。昔は、車料金はもっと高かったのですが、しまなみ海道に対抗するための料金設定にしたのでしょうか。この料金で民間会社の経営が成り立つのか心配しましたが、きっと公的補助もあるのかもしれない。わずか2分で向島に到着して、ちょうど尾道水道に入ってきた「百風」の姿をカメラに収めてから歌港まで移動しました。わずか10分で着きました。歌港では、歌戸運航も備後商船も同じポンツーンを使っていました。

「百風」に乗船して、途中2つの港に寄港して、常石造船の真ん中あたりの棧橋まで40分の航海でした。ほとんどの車は、途中の百島の福田港で乗下船し、歌港から常石港まで乗っていた車は私の車だけでした。きっと「物好き」と思われたかもしれません。しかし、途中ツネイシクラフト&ファシリティーズのアルミ船工場や、バルクキャリアの建造船が並ぶ常石造船を眺めながらの航海は短いながら快適でした。こちらの料金は2600円ほどでしたので、やはり物好きの部類に入るのでしょうか。陸上を走ればほとんど同じ時間で走れ、料金も無料です。

さて、常石に上陸してから陸路、鞆の浦に向かいました。この日の仙水島への福山市営渡船には、「平成いろは丸」ではなく、古い「第2べんてん」が就航していました。たぶん「いろは丸」はドック中だったのでしょう。

鞆の浦の内港から沖合の走島へ、「神勢丸」というカーフェリーが就航しています。少し前までは旅客船の「第13神勢丸」が就航していましたが、8年ほど前にカーフェリーに代わっており、6台の車が積載できるようになっていました。



① 尾道水道の渡船「にゆうしまなみ」で、向島に渡りました。運賃は人も車も130円でした。



備後商船の高速旅客船「ニューびんご」が尾道を出て、常石に向かっていました。



② 尾道側に戻る「ニューしまなみ」の背景には、尾道の千光寺山が見えています。山が水道に迫る坂の町です。



③ 備後商船の「百風」が水道に入ってきて、尾道の旅客船ターミナルに向かいました。この船が折り返し常石に向かう途中で歌港に寄ります。



④ 歌戸渡しの全景で、「第1歌戸丸」が、歌港に向かって来ているのが見えます。この水道を歌戸運航株がわずか3分で結んでいます。



⑤ 歌戸運航株の「第1歌戸丸」です。「第2歌戸丸」の姿は見えませんでした。



⑥ 歌戸渡船と備後商船は、歌港で同じポンツーンを使っていました。左が備後商船の「百風」、右が「第1歌戸丸」です。



⑦ 「百風」の銘板です。



⑧ 「百風」の車両デッキです。



⑨ ツネイシクラフト&ファシリティーズのアルミ船工場です。



⑩ 山の中腹にはかつての真藤会館と呼ばれた常石造船の迎賓館があります。かつては、船仲間と、学生と一緒に泊まったものです。ふもとには柳原良平画伯の博物館がありました。



⑪ 百島(ももしま)のフェリー桟橋の横に、百島診療所のボートが停泊していました。周辺の離島を回って医療を提供するボートのようです。



⑫ 百島の福田港に寄港しました。ここからはたくさん車が乗船しました。ここから対岸の常石まではわずか 10 分の航海です。



⑬ 船上から常石造船の建造船をたくさん見ることができました。





⑭ 常石造船の工場を眺めながらの、最後の航海過程です。



⑮ 船は常石造船のど真ん中の浮桟橋に到着します。



⑯ 常石から 30 分ほどのドライブで鞆の浦に到着しました。鞆の浦の石積みの防波堤の上で、走島から入港する「神勢丸」を待ちました。



⑰ 鞆の浦の港に入港・着岸する「神勢丸」の姿です。



⑱ この日の仙水島航路には予備船の「第 2 べんてん」が就航していました。